



新任の先生方オススメの本、第2弾です♪紹介された本は全て図書館にあります☆

『ものの見方がかわる 座右の寓話』

戸田智弘・著

(デイスカヴァー・トゥエンティワン)



寓話とその解説が収められた中から、興味をひかれた項目を拾い読みできます。今回はその中から、「半分の煎餅」と「空の茶碗」という二つの寓話をご紹介します。「半分の煎餅」では、1.01と0.99の法則を通じて、日々の小さな積み重ねがやがて大きな差となることを教えてください。一方、「空の茶碗」では、素直さこそが学びの出発点であるという大切な教訓が描かれています。

ちなみに、私が座右の寓話として心に留めておきたいのは、「ひばりの引っ越し」と「六人の盲人と象」の二つです。どちらも深い示唆に富んだ内容ですので、興味のある人は読んでみてください。

新着図書案内 6月

書名	著者名	出版社	請求記号
論理的思考とは何か	渡邊雅子	岩波書店	116
ガザとは何か	岡真理	大和書房	302
テクノ封建制	ヤニス・バルファキス	集英社	332
iPS細胞の歩みと挑戦	京都大学iPS細胞研究所	東京書籍	491
絵でみる貿易のしくみ	片山立志	日本能率協会マネジメントセンター	678
イザドラ・ダンカン	柳下恵美	国書刊行会	769
それいけ！平安部	宮島未奈	小学館	913.6
夜の日記	ヴィーラ・ヒラナンダニ	作品社	933



『反応しない練習』

あらゆる悩みが消えていくブッダの超・合理的な「考え方」

草薙龍瞬・著 (KADOKAWA)



自分が高校生の頃に何を知らなかったかな、何を知っていればその後の人生がもう少し楽だったかな？と思い選びました。この本は中学を中退後、16歳で家出・上京し、放浪の後に東大法学部を卒業するというビリギャルを超える(!?)ミラクルを起こした著者が、「生き方」を探究し続け僧侶になり、実用的な「仏教」の本質を伝えるために書いた本です。

人生、たくさん悩みます。特に、これから皆さんは大学受験という人生の大きな幹を決定する中で、さらに大きな悩みを抱くこともあるでしょう。今までもたくさん悩んで色々な経験をする中で作られた自分の人生。振り返れば悩みも決して悪ではないけれど、この考え方を頭の隅に置いておくだけで少しは楽になれるかも？私も子育てという正解なき悩みにできるだけ「反応しない」ように日々練習中です。興味のある人は同著「これも修行のうち。」も是非一緒に読んでみてください。

『思考の整理学』

外山滋比古・著 (筑摩書房)



もう何十年も前から言われ続けていることですが、人間の仕事の多くは、いずれIT技術の進歩によって失われていくと予想されています。最近では、チャットGTPなどのAIの活用について話題に上がることも多くなり、いよいよコンピュータに仕事を奪われる未来も近くなってきたように感じます。このような世の中で人間が活躍するためには、人間にしかできない創造的思考が必要になるのではないかと思います。

この本は、創造的思考をするためには、どのように情報を集め、取捨選択をして、効率的に思考していけばいいのか、その方法についてのヒントを与えてくれます。

全ての人におすすめの本ですが、特に大学などに進学を考えている人にぜひ読んでもらいたいです。

『こころ』

夏目漱石・著（新潮社）



小生のお薦めの本は、夏目漱石の『こころ』です。

小生は、中学生の頃にこの本と出合ったような気がします。この本は、国語の教科書にも広く掲載されていますので、学生の皆さんにも馴染み深いと思います。まだ読まれていない学生さんのために紹介しますと、この本は、一言でいうと、人間の利己的な心の動きを綴ったものです。読み進めるうちに嫌な気分になってきますが、人間の心理として変に納得する要素もあります。気になる方は、是非お読み頂ければと思います。

ここで、文中に登場する「先生」が親友のKに言われ、別の場面で「先生」がKにオウム返しした言葉を紹介しておきます。それは、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」です。小生は、初めてこの文言を聞いたとき、単純にもっともだと思いました。学生みなさんは、自分の発言がブーメランとなって戻ってきたら、どう感じますか？

『話を聞かない男、地図が読めない女』

アラン・ピーズ、バーバラ・ピーズ著/藤井留美・訳(主婦の友社)



皆さんに紹介する書籍については『話を聞かない男、地図が読めない女』です。著者はALLAN PEASEとBARBARA PEASEというご夫婦によって書かれたものです。この本が発行されたのは、25年前の事です。当時35才だった私は、この本を読んで「なるほど！異性(女性)ってそうなのか？」と、それこそ目から鱗が落ちました。それからは妻や娘に対して、私自身の話し方や態度に変化が生じたのもこの頃からでした。

内容につきましては読んでいただけたら解ると思いますが、簡単に説明しますと、男性と女性の考え方の違いについて、それは「なぜ？」を解説された書籍となっています。

今後、各方面に羽ばたいていける高北生の皆さんにとって避けて通れないのが、異性を含めた所謂、対人関係だと思えます。少しでも異性に関してご参考になればと思いますが、時間が空いた時にでも読んでみてはいかがでしょうか。

『桐島、部活やめるってよ』

朝井リョウ・著（集英社）



「バレー部のスターで絶対的なリベロである桐島が部活をやめる」ということから物語ははスタートします。とはいえ物語としては暗い話ではなく、最終的には様々な暗い気持ちをもつ生徒にとっての「再出発に至るまでの過程」を描いた作品です。劣等感や疎外感・孤独感を感じている多感な思春期の中高生が共感できる日常の出来事を散りばめつつ、もがき苦しみながらも羨望や嫉妬を乗り越え自分だけの再出発地点（スポットライト）を見つけていく…という内容です。

「バレー部の桐島」という存在が失われて初めて、直接的に間接的に無視できない影響をそれぞれの人物の日常生活に与えていたという事実気づきます。まるでそれは生態系のように互いに作用し合いながら日々の高校生活を構築しているのです。

特にこの作品の素晴らしいところはスクールカースト「下位」と自認している映画部の前田涼也が、野球部をサボっているにもかかわらず運動能力が高く「上位」の生徒である菊池宏樹に意図せずよい影響を及ぼしていく、というところにあります。

誰かが頑張っているところを見ると、自分も頑張ろうと感化されますよね。物語の最後で映画部の前田涼也に感化された菊池宏樹が野球グラウンドに向かっていくシーンは、物語では描かれていませんが巡り巡って桐島がバレー部に再び向き合い再出発するのではないか、ということを示唆しているかもしれないと感じました。

映画版のラストで流れる主題歌（高橋優『陽はまた昇る』）も衝撃的ではありますが、鬱屈とした人間の内面を描く歌詞とメロディがとてもロックでオススメです。

この作品を読み、高北生の生徒一人ひとりにおける「スポットライト（光るもの）」は何なのか、皆さんと一緒に悩みながら探していきたいと考えきっかけになりました。